

『生活文化研究所報告』第四十七号
二〇二〇年三月刊 別刷

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（一八）

藺部 寿樹

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（一八）

菌部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二一（明治書院、二〇〇四年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（一五） 応永二三年～二七年（一四一六～二〇）『米沢史学』三〇～三四号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五四号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四六号（二〇一四～二〇一九年）

○現代語訳（一六） 応永二八年（一四二一）一月一日～四月三〇日まで。

『米沢史学』三五号（二〇一九年）

○現代語訳（一七） 応永二八年五月一日～八月三〇日まで。『紀要』五五号（二〇一九年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二八年九月一日から一二月二九日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものは

ない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

同「研究余滴 小さな語誌―「雑熱」について―」（『国文学攷』一五六号、一九九七年）

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇二～二〇一四年）

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」（同

『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の

領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

松蘭斎『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

（応永二十八年）九月一日、雨が降った。「すべてのことがめでたい」と予

祝した。

今夜は御香宮の祭礼である。お神輿を飾る錦が破れたので、新調して

美しくなった。御旅所でお神輿の巡行を見物した。田向経良参議・庭

田重有朝臣・田向長資朝臣・慶寿丸・寿蔵主らも同じく見物した。

神事の相撲に他郷の者たちが群れ集まって、数十番の取り組みとなった。最後は芹河の村人が打ち勝った。深夜に終わって、宮家に帰った。五日、晴。御旅所に参詣した。

女兒の誕生は飽き飽きしており、無用だ

さて妻の二条局が産所である実家の庭田家へ向かった。そしてすぐに無事出産した。出産は午前九時であった。生まれたのは女兒である。もう女の子には飽き飽きしており、無用の子である。ただし、無事に誕生したのはめでたいことである。

馬場を造成する

御所西南の小道を東へ通して、馬場とした。

八日、晴。神幸の道を掃除したというので、見に行つた。ついでに禅勝庵に行き、少し酒を飲んだ。田向経良参議以下、大勢で酒を飲んだ。

室町殿は今日から石清水八幡宮へお籠りになるそうだ。

九日、晴。「重陽の節供でとても幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものように御節供のお祝いをした。

祭礼を見物するために、田向家へ行つた。私の息子や三人の娘・東御方・廊御方・兄の未亡人である上臈・今参らを連れて行つた。用健の老母である宝珠庵主もいらつしやっていた。田向家の人々も大勢揃っていた。椎野寺主もいらつしやっていた。

さて毎月恒例の連歌会、今月は田向参議が当番幹事である。このお祭りのついでに、いつものように連歌会の準備をさせた。去年の九月もこのように連歌会をしたので、佳い先例となっている。

先ず連歌会を始めた。参加者はいつもの通りである。次に一献の酒

宴をした。

午後五時に祭礼の行列が来た。風流笠が四〜五本でいつもより少しきれいになっていた。その他は、いつもと変わらない。

祭礼行列が出て行つてから、お膳が出された。そしてまた一献の酒宴をしてから、連歌を再開した。夜に入つて、百韻が終わつた。それで座を起ち、すぐに帰つた。

御香宮神事相撲は近年にない大相撲

山田宮の猿楽もいつも通り行われたそうだ。その後、御香宮で相撲があつた。京辺りの者どもが群れ集まつたという。相撲の最中に喧嘩があつたが、すぐに収まつたそうだ。田向参議・重有・長資ら朝臣が見物していた。最近にない大相撲で、相撲巧者が多く、面白い取り組みが多かつたそうだ。翌日の午前九時まで相撲は続いたという。

医師の心知客が死ぬ

さて医師の心知客が今日、亡くなつたそうだ。名医であつたので、とても惜しいことである。宮家にも時々来ていたので、とても残念だ。十日、晴。獅子舞がやつて来た。いつものように舞つた。ご褒美を与えた。

大光明寺新住職の就任

さて大光明寺の新住職である大椿和尚が今日、寺に入った。この人は南禅寺の住職だつた方で、八十歳になるといふ。和尚に仕える衣鉢侍者が来て、和尚に代わつて入寺の挨拶に来た。

玉櫛禅門子息の醍醐寺尊性房が来る

玉櫛禅門の息子である醍醐寺の尊性房が来た。初めて対面した。亡くなつた玉櫛禅門とは懇意にしていたので、今になるまで尊性房が挨拶に来なかつたのは、不本意なことである。

法安寺猿楽を見る

さて法安寺の猿楽を見学に行った。椎野寺主・田向参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・具侍者・寿蔵主・正真・稚児の聖乗と梵祐らを連れて行った。その他、上臈・塔頭比丘尼たち・田向家の女性たち・山田香雲庵主・宮家の女官ら、大勢が見物していた。そのため、見物席が狭苦しかった。

猿楽は五番演じられた。褒美に太刀一振りを与えた。法安寺の住職がいつものように一献の酒宴を準備してくれた。

ところで、大光明寺長老や常在光院長老の大岳和尚、その他長老の僧たちが法安寺の猿楽を見物したいと希望していたので、大光明寺からも見物席が設けられていた。自分の寺に新任職が就任するその日に、他寺の猿楽を見物するというのは、いかがなものであろうか。

十一日、晴。大光明寺長老が来たので、対面した。お茶でもてなした後、すぐに出ていった。けっこうなご老人だった。

今夜は権現で猿楽がある。お忍びで見物に行った。椎野寺主や田向参議以下を連れて行った。宮家の女性たち、東御方や上臈以下は昨日と同様である。猿楽は四番演じられた。椎野が褒美の太刀をお与えになった。

小川禅啓がいつものように一献の酒宴を準備してくれた。深夜になって酒宴が終わり、宮家へ帰った。秋の神事が皆無事に終わって、めでたいことである。

十二日、晴。明晩は名月なので、和歌の短冊を皆に配った。配布先はいつもの通りである。外様の家司である世尊寺行豊朝臣や冷泉正永らにも短冊を送った。田向経良参議が京都へ出て行った。

名月のお月見

十三日、晴。名月の晩なのに、少し曇っていて残念だ。いつものようにお月見をした。和歌の短冊を取り集めて、和歌を披露させた。披露が終わってから、連歌を懐紙一折り分おこなった。

大光明寺新任職は五山の上である南禅寺の元住職で高德な長老

十四日、晴。大光明寺へ行った。これは、長老がお寺に入ったのを祝いするためである。前々の長老が寺へ入ったときは、お祝いに行かなかった。でも今回は五山の上である南禅寺の元住職という高德な長老なので、特別にお祝いに行ったのである。これは、用健や寿蔵主の助言によるものである。地藏殿で長老と対面した。お茶でもてなしていただいでから、すぐに帰った。

豊原郷秋が来た。音楽会で盤渉調の曲七つを演奏した。田向長資朝臣も参加した。長資は笙と太鼓を兼ねて演奏した。

広橋家の所領が没収される

さて聞くところによると、広橋兼宣大納言は面目を失って、家の領地が調べられて、没収されたそうだった。面目を失った次第は、先日、日野有光大納言が就任のお礼をする際の出来事であった。息子の広橋宣光朝臣が日野有光のお供をすると、事前に承諾していた。ところがその期に及んで、牛車が壊れたと言ってお供せず、朝廷の陣の座で日野の許に来たそうだった。

それに対して日野資教一位禅門が激怒して、後小松上皇様や室町殿へ訴えた。室町殿はもともと日野を不快にお思いで謹慎させていたところ、今回の事が度重なってご不快が深まった。それでとうとう領地も没収なさったそうだった。

昨日の連歌の続きをおこなった。

十六日、晴。いつものように身を浄めた。

水無瀬重親が死ぬ

たった今聞いたところによると、水無瀬重親少将が他界したそう。

水無瀬具隆三位入道法覚が一昨年死去したばかりである。まだ幾年も経たずに、今回の事となった。とてもかわいそう。重親には一人も子供がおらず、養子をとっていたそう。

室町殿が石清水八幡宮へ向かったという。

十七日、晴。室町殿は伊勢神宮へ参詣なさったそう。公卿や殿上人がお供をしており、晴れがましい行列だという。

薪順事

十八日、晴。御湯殿の上で、薪を順番に焼く行事を少しした。椎野寺主が主催の連歌会があった。重有朝臣・長資朝臣が参加したそう。

秋の遊山に出る

十九日、晴。遊山に出かけた。椎野寺主・田向参議以下、寿蔵主・正真らを連れて行った。不動堂で酒を飲んだ。そこで少し、詠み捨ての連歌を詠んだ。しばらくして宮家へ帰った。

夜に御湯殿の上で、薪を順番に焼く行事をした。私が当番で主催したのである。先日の名月連歌百韻の続きをした。名月の夜から数日が経っており、面白くなかった。

二十日、晴。いつものように身を浄めた。父・大通院の御命日には、毎月このようにしているのである。

二十一日、雨が降った。朝早く重有朝臣が薪を順番に焼く会の準備をした。椎野寺主が自分の寺に帰るので、薪を急いで焼いた。

菱食の包丁式

徳大寺右衛門佐が菱食(※)を献上してきたので、早速味わった。

広時が私の御前で包丁式を披露して、菱食をさばってくれた。

慈光寺持経が世捨て人になる

さてたった今聞いたところによると、今朝、六位蔵人最上位の慈光寺持経が遁世して、高野山へ登ったそう。世を捨てた趣旨は誰も聞いておらず、不審なことである。

夜、長資朝臣が薪を順番に焼く会の準備をした。一日に二回も薪を焼いたので、飽き飽きした。これで当番は一回りして終わった。

雨がひどいので、椎野寺主は寺にはお帰りにならなかった。

※「菱食」(ひしくい)：原文では「土喰」とある。菱食は雁の一種。今年始めて越冬してきた初物であろう。

二十二日、晴。椎野寺主が寺へ帰った。

浄金剛院曼荼羅堂の勸進修理

さて椎野寺主のお寺である浄金剛院の曼荼羅堂が壊れたので、明日から修理するそう。これは伏見荘の土倉・宝泉が大檀那の一員となって寄付を募り造営するという。その寄付金総額は、錢百貫文余りにもなったそう。宝泉の亡母七回忌の追善供養として、この曼荼羅堂の修理をするという。その志はもつとも神妙である。

浄金剛院でも諸方の檀那から寄付を募った。宮家からもささやかではあるが、寄付をした。

今出川公行の没後百ヶ日

二十三日、晴。故今出川公行前左大臣の没後百ヶ日である。時間が夢のように過ぎ去っていく。少なからぬ悲しみに包まれている。いまだ今出川家の後を継ぐ者がいない状況だという。今出川家の領地もすべて没収されたので、家の召使いたちは歎いている。しかし、まだ何も解決していない。

今出川実富大納言が家を継承したいと申請しているが、彼に相続させないというのが幕府や朝廷の方針だそう。今出川家が断絶するのはほぼ間違いないだろう。

つらつらと考えてみるに、花山院家には一子もなく、持忠を養子にして家を相続させた。世間のよくある事例とは、こういうものである。ところが今出川家に何の罪科があつて、このように家を亡ぼされるのだろうか。全く納得できない事である。政道として、道理に背くことではないか。天皇陛下や將軍がどのようにお考えなのか、さっぱり理解できない。歎くのは、この事ばかりである。ただ前世での行いが悪かつたせいであろうか。仕方の無いことである。

慈光寺持経が連れ戻される

ところで慈光寺持経が逃げ出した件であるが、世尊寺行豊朝臣の追っ手が追跡し天王寺で行き会つて、持経を足止めした。そしてすぐに京都へ戻つたそうである。上皇様のお手紙によつて、呼び戻されたという。

遁世の発端は酒席での戯れ合い

事の発端は、二十日の夜、内裏で大酒を飲んでいたことにある。侍臣が悪戯をして、諍いとなつた。そしてつかみ合いの喧嘩となり、持経の烏帽子が打ち落とされたという。つまり事の起こりは、他愛もない戯れ合いなのである。たんなる酔狂だ。口にするのも馬鹿らしい。

【頭書】（日記の上方の隙間に書き加えた記事）持経の烏帽子が打ち落とされたというのは嘘であつた。

大光明寺僧、酔つて転落し陰囊打撲で死す

二十四日、晴。今日の明け方、大光明寺の都寺つづが亡くなつた。去る十八日の夜、酔つ払つて縁側から落ち、陰囊を打つて病となり、たちまち

命を失つたそう。すべては前世での悪行の報いであろうか。多年、大光明寺の住僧であり、私とは仲の良い人であつた。かわいそう。たぶん将来は住職になるべき人であつた（※）。

※「たぶん将来は住職になるべき人であつた」：原文は「多く座主たるべきなり」とある。臨濟宗寺院に座主という役職はないので、ここでは寺の住職の意とした。

赤松義祐が若党に刺し殺される

二十六日、晴。聞くところによると、今朝、赤松義祐有馬入道が若い侍に刺し殺された。明け方の時分、有馬入道が寝所に入って寝ていたところ、刺し殺されたそう。有馬入道の二歳の孫も同じく刺し殺された。乳母の女性も怪我をした。当番で警護していた若侍たち二三人も同じく刺し殺されたそう。

その後、犯人の若い侍は村井のところへ逃げ込んで、かくまつてくれるよう頼んだそう。ところが赤松の軍勢が大勢、村井のところへ押し寄せたので、犯人はその場で切腹したという。犯行の動機はまったく分かつていないらしい。

有馬は、赤松家の惣領である赤松義則入道の弟で、一家の重要人物であつた。不思議なことである。

今出川家に預けておいた楽器や道具などを宮家に取り戻した。

熱瘡にはゴンズイという木が効く

二十七日、にわか雨が降つた。夏頃から小さなできものがある。最近、病状が悪化して心配なので、医師に診察させた。带状疱疹（※）だそう。ゴンズイ（※）という木で洗えばよいとのことだ。良薬を献上してくれた。

※「带状疱疹」：原文では「熱瘡ねつか」とある。

※「ゴンズイ」：原文では「こんすい」とある。ゴンズイはミツバウツギ科の小高木。中国では果実や種子を腹痛や下痢止めとして用いられる（清水健美「ゴンズイ」『朝日植物の世界』三、朝日新聞社、一九九七年、三〇〇～三〇三頁）。

三十日、晴。九月も終わり。吉日なので、和歌の題を出して短冊を配った。配った先は、田向参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・正永らである。夜に和歌を披露した。薪を焼く会をした。

浄金剛院曼荼羅堂の修理が完了した

さて浄金剛院曼荼羅堂の修理が昨日完工したそうさ。さらに光明庵まですべて修理を終えたという。これは宝泉の大きな功績である。修理の準備をしたのは神妙なことだ。すべては神様仏様の思召しであろう。めでたいことである。

十月一日、晴。「初冬の良い兆しがある。とても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

慈光寺持経の出走は、称光天皇の美酒を諫めたため

二日、晴。慈光寺持経出走のことだが、称光天皇陛下がお酔いになつていたので、厳しくお諫めたそうさ。それで主従がいさかいとなつたので、持経は内裏から逃げ出したという。侍臣たちと諍いになって烏帽子を打ち落とされたからというの、嘘だった。田向三位が京都へでかけて聞いてきた実説を話してくれた。

五日、晴。妻の二条殿が産所から帰ってきた。この度生まれた娘も連れて来た。

瀕死の老庵主、伏見宮貞成たちを惣得庵へ招待する

さて惣得庵主に招待されたので、行って来た。私の息子・東御方・廊御方・二条殿を連れて行った。田向参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・寿蔵主も同じく惣得庵に来た。

宮家からお土産や酒樽などを持っていった。庵主は起居がままならな

い。年老いて病状がひどいので、今にも亡くなってしまいそうさ。ただこの世の名残に皆を招待したという。一献が数献となった。我が息子も引き出物を庵主に差し上げた。息子は初めて惣得庵に来たので、そのお祝いとして差し上げたのである。夕方、宮家へ帰った。

貞成の顔がまた腫れる

六日、晴。朝早く起き様に（※）病気でとても苦しんだ。顔が腫れていたのである（※）。もしかしたら、小さなでき物が私の体内に入り込んだのかもしれない。

下剤を飲む

それで下剤（※）を飲んだら、すぐにお通じがあつた。しかし気分は悪くとても苦しい。宮家の面々も私の病状に驚いていた。

※「起き様に」：原文は「振り付けて」とある。

※「顔が腫れていたのである」：同じ応永二十八年四月二十八日も同様の症状がみられた。

※「下剤」：原文は「写薬」とある。これを瀉薬（しゃやく。下剤）の誤記とみた。

七日、晴。病状は前日と変わらない。また下剤を飲んだ。

心知客弟子の青竜庵慶音

八日、晴。医師心知客の弟子の青竜庵慶音に対して、私の病状を尋ねてみた。やはりでき物が体内に入ったのであろうと言ってきた。良い薬を献上してくれた。

十一日、晴。今日も病状は変わらない。ただし少し快復したようである。

四条隆盛、御厨子所得選と度々密通する

さて聞くところによると、この頃、四条隆盛朝臣は称光天皇陛下や後小松上皇様からお叱りを受けていて、出仕を止められている。それで隆盛は父の隆直卿から縁を切られたそうさ。事の起こりは、隆盛が内裏御厨子所の女官と密通して、子供を二人も産ませたことにある。隆盛に

はこういうことが度々あるので、今回は厳しく処罰なさったそうさ。

慈光寺持経、所領の河内国門真荘を没収される

慈光寺持経を称光天皇陛下が室町殿へ訴えなさったので、持経は出仕を停止された。そしてさらに領地の河内国門真荘も没収されたそうさ。

四辻季保朝臣も後小松上皇様からお叱りを受けて、出仕を止められてる。この事の起こりは知らない。

今出川実富、相国寺法界門下で足利義持に直訴する

今出川実富大納言が家相続に関して、室町殿が相国寺へお入りになった折、法界門の下で直訴したそうさ。それでも、室町殿からは今出川家を相続してはいけないと重ねてのご決定があったという。大納言以上の身分の者が道端で直訴するとは自分勝手に過ぎると、もっぱらのうわさとなっているそうさ。

以上、いろいろな世間話を耳にした。

十二日、晴。病気が次第に快復しており、うれしい。今夜、明け方に地震があった。

足利義持が無帽の普段着で参内する

十六日、晴。長資朝臣が京へ出かけた。そして帰ってから、世間話をしてくれた。室町殿が烏帽子も付けない普段着姿で朝廷に現れたそうさ。朝廷へ普段着でやってくるのは、とても希なことである。

持経の件。領地の門真荘は青蓮院の稚児に与えられたそうさ。今となつては、持経の進退も窮まったといえよう。かわいそうさ、かわいそうさ。

暴風雨・小地震・鳴動

十八日、晴。今夜は暴風が吹き、早くも雨が降り出した。小さな地震もあった。また石清水八幡宮が大きな音を立てて揺れ動いた。

妙見社の崇り

二十一日、晴。妙見社の社前左右に数十本の松を植えた。前々から神木が

切られて御崇りがあったので、植えたのである。

また宮家の御湯殿の上、東向きの庭に小山を築いた。そして石や木などを基本通りあしらって、庭を整備した。

今夜は亥子なので、いつものように亥子餅を食べた。

慈光寺光仲へ門真荘半分が戻される

ところで聞いたところによると、慈光寺光仲へ門真荘の半分が戻されたそうさ。領地がなくては老後たちまちに餓死してしまうと種々訴えたら、領地の半分を戻してくれたそうさ。ただし持経の罪はこれまでと同様のままだという。

二十二日、晴。今日は一日中、御湯殿の上、東向きの庭を整備していた。

二十三日、晴。毎月恒例の連歌会、いつものように当番幹事の重有朝臣が準備してくれた。

ところで石清水八幡宮の鳥居造営で、鳥居の足の材料として山城国の木が差し押さえられるという。それで、伏見山の木も六〜七本提供するようにと、山城国守護代の三方範忠入道が申し入れてきた。

伏見荘には国役免除の先例あり

先例として伏見荘は国の課役を免除されているので、まったく提供すべき山の木はないと返答しておいた。

二十七日、晴。御湯殿の上、東向きの庭をまた少し手直した。即成院善基が来て、石を立てた。善基は酒海という大きな酒甕を持参してきた。思いがけず、酒を味わった。

順御粥

さて、順番でお粥を用意する会を始めた。まず廊御方が準備してくれた。田向参議以下、寿蔵主・善基らが参加した。

二十八日、晴。石清水八幡宮鳥居の足の材料について喧しく言ってくるので、今日、山の木五本を提供した。伏見荘には国の課役を勤めた先例はないのだけれども、石清水八幡宮のことなので特別に進上したのであ

る。

内野御経

平安京大内裏の跡である内野を供養するためにお経を読む法会が、今日、最終日を迎えた。大勢の僧三百三十三人が清水寺で三日間、お経を読んだ。これは造営した御塔の供養である。

清水坂で大勢が圧死したのは、天狗の仕業か

そのため今日、清水坂で大勢の人が群れ集まった。人や馬が押し合いへし合いしたため、輿が打ち破られ、多くの人が押し殺されたそうだった。天狗の仕業であろうか。不思議なことである。

二十九日、晴。今日は清水坂の塔供養で、童の舞があるそうだった。

將軍塚が鳴動する

ところで、最近、將軍塚が大きな音を立てて揺れ動いたそうだった。將軍塚が日本国中に異変を知らせたのであろうか。

十一月一日、晴。「すべての事がめでたい」と予祝した。いつものように、月始めのお祝いをした。

上皇御所前庭に池を築く

二日、晴。上皇御所の御前庭に池をお作りになるそうだった。それで諸人が石や木を進上しているという。宮家からも木を二〜三本献上しようと思っただが、適当な木がない。

それで梅林庵へ行ってみた。田向参議・重有・長資ら朝臣を連れて行った。庵主に前庭の梅二〜三本がほしいと申し入れた。ただし内々には小川禅啓が買い付けるようにすると話をした。しかし明確な返答がない。それでとりあえず、この三本の梅の木に札を付けておいた。

しばらくして帰り、風呂に入った。小さなでき物が治ってきたので、病後初めてのお湯である。

さて畠山満家が管領として初めて出仕したそうだった。その行列は厳めしいものだったという。

三日、晴。即成院主梵基と同院の善基らが一献の酒を持参して来た。それで酒を飲んだ。田向参議以下寿蔵主らも参加した。毎年秋に即成院から酒を持参するのは、良い慣例である。

四日、晴。庭田家の梅の木一本を庭田重有朝臣が上皇御所へ献上したそうだった。

梅林庵の梅の木三本を五貫文で買う

五日、晴。梅林庵の梅の件だが、内々に小川禅啓が交渉を続けている。しかし庵主はいまだに了承しない。それで光台寺の住職に交渉させたら、ようやく了承した。梅の木三本を五貫文で買い付けた。明日、掘り取りに行くこと決まった。

六日、晴。朝早く梅林庵へ行った。田向参議・重有朝臣・慶寿丸を連れて行った。大小の梅の木、合計三本を掘り取った。このうち小さな木は以前から欲しかったものなので、宮家の前庭に植えた。梅林庵主の光意・光台寺住職等が立ち合った。彼らと少し酒を飲んだ。光意に御扇を与えた。

そうこうしている内に、梅の木を掘り取り終わった。荷車二両に積み込んだ。祇園社執行に荷車を貸してくれるように命じた。それで一両を貸してくれた。もう一両は九条辺りから借り出してきたものだ。

後小松上皇へ梅や信濃桜の木三本を献上した

この梅の木二本に加えて、宮家御所前庭の信濃桜一本を加え、かれこれ三本を上皇御所へ進呈した。いつものように冷泉永基朝臣を通して献上したのである。

今夜は当番で順に薪を焼く会だった。いつものように重有朝臣が準備をしてくれた。ちょうど冷たい嵐が吹き、雪が吹き飛んでいる状況だったので、薪を焼く会は面白かった。

初雪の雪見酒

七日、初雪が降った。廊御方が恒例となっている雪見酒を酒海という大き

な酒甕で用意してくれた。寿蔵主もまた御酒を持参して来た。あれやこれやで雪見酒を堪能した。田向参議以下も参加した。

後小松上皇、宮家の献上木を喜ぶ

さて後小松上皇様の御返事が届いた。上皇様の使者が語ることには、昨夜午後七時に当方の送った木が上皇御所に届いたそうだ。その時、取り次ぎ役の冷泉永基朝臣は御所から下がっていたが、御所に急いで戻り上皇様へお披露目したそうだ。上皇様ご自身がお出ましになって木を御覧になり、お喜びだったという。

正親町三条公雅大納言以下、上皇様の近臣五、六人もそこに控えていて、皆が木を褒めていた。御庭の管理をする河原者が御所から退出していたので、侍臣たちが指図して木を植えさせたそうだ。上皇様がお喜びだというお返事をいただき、感無量である。

また私が訴えている件に関して、先月、室町殿が上皇御所へいらつしやった時に、伏見宮家が経済的に苦しい状態であるとお話し下さったそうだ。それで、上皇様が近江国山前荘の件について手続きが済むのをお待ちくださいと私宛に仰ったそうだ。当方が献上した木をお気に入りくださったことで、このように仰せ下さったのである。宮家に対してご機嫌がうるわしく、ありがたいことである。

あの梅の木一本は大木で、紅梅の花が素晴らしい木である。もう一本はやや小さな木であるが、どちらも枝振りが素晴らしいので、院の近臣たちが褒めたのは当然のことであろう。

宮家の庭に植えた梅の木も小さな木である。しかし枝振りが素晴らしいので、以前から私のお気に入りであった。今回の事をきっかけとして、この木を私の手許に留めたのである。

九日、晴。田向家の庭の梅の木一本と唐桃の木一本を、田向参議が上皇様へ献上したそうだ。正親町三条公雅大納言を通して内々にお伺いを立てて、献上したという。

今日、上皇御所では庭の石引きをしたそうだ。このところ、上皇様は御庭の池を整備するのにかかりつきりだ。

室町殿は今日から北野天満宮にお籠もりになった。

後小松上皇へ蜜柑を献上する

十日、晴。いつものように上皇様へ蜜柑を二籠差し上げた。すぐに上皇様のお返事があった。

十二日、晴。このところ工事をしていた大光明寺山門の扉が完成した。

寺家が興隆するのはめでたいことなので、田向参議を遣わしてお祝した。大光明寺の長老が自画自賛していたそうだ。

十三日、雪が降った。順番に薪を焼く会を、いつものように当番の長資朝臣が準備してくれた。

惣得庵主が亡くなる

さて惣得庵主が今朝の午前九時に亡くなったそうだ。年老いてひどく病んでいたもので、長くはもつまいとかねてから案じていたところである。八十九歳だった。

光厳上皇の時代以来、手に取るように万事ご存知でいらつしやった（※）。他の人とは異なって、宮家とは親しい間柄であった。特に悲しみが深い。廊御方が惣得庵へ行き、死を看取ったそうだ。

庵主はこの御所のことをととても大事に思ってくださいだったので、とても辛い。

※「手に取るように万事ご存知でいらつしやった」：原文では「鏡に向かうごとく覚悟せらる」とある。

十五日、晴れていたが、夜には雨が降り出した。東側の庭の整備がほぼ終わったので、砂を撒いて仕上げた。

さて禅照庵主が酒樽を一つ持参して来た。望みのことがあるという。鳥羽のあたりに小さな寺庵がある。その庵の号を記す横額を私に書いてほしいと、ある人が望んでいるらしい。私は達筆ではないから庵号を書

くなど思いもよらぬことだと断った。しかしどうしても願うので、仕方なく書くことにした。理不尽な願い出あり、困ったものだ。

足利義持へ蜜柑二籠を献上する

十六日、雨は止んだ。室町殿に蜜柑二籠を献上した。裏松義資中納言へ手紙を書き、蜜柑を室町殿へ取り次いでほしいと依頼した。それで裏松卿にも蜜柑一籠を与えた。

蜜柑の使者が帰ってきた。室町殿は上皇御所へお出かけ中で留守だった。それで室町御所の同朋衆どうぼうしゅうに申し付けて、受け取らせたそうだった。

薪を焼く会、兄の未亡人である上臈が当番としていつものように準備してくれた。小さなでき物がまた腫れてきた。風呂に入った。珠侍者が来た。皆と一緒に薪の火にあたった(※)。

※「珠侍者が来た。皆と一緒に薪の火にあたった」：原文には「珠侍者参る、同じく相伴す」とある。

十八日、晴。父・大通院の御仏事として、今夜からお経を読むことになった。いつものように宮家の男女で読経の当番を組んだ。寿蔵主・即成院善基・稚児の即成院梵祐らも読経当番に参加してくれた。

栄仁親王の法事

十九日、晴。明日の御仏事を繰り上げて、型通りに本日執行した。いつものように一時間ほどお経を読んだ。読経後の軽食は、寿蔵主が取り計らってくれた。即成院主や山田香雲庵の比丘尼たちも来てくれた。これがいつもの参加者である。

聞くとところによると、五辻教仲朝臣は病気が重態なので、出家を遂げたそうだった。

二十日、晴。朝早く大光明寺へお参りした。田向参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・冷泉正永らを連れて行った。宮家の女性たち、東御方・廊御方・妻の二条殿・山田香雲庵真幸も同じくお参りした。読経の法会に一時間、参列した。その後、焼香してから宮家へ帰った。

帰り際、惣得庵の門前に立ち寄ると、御寮と明元に出会った。亡くなった庵主のお悔やみを申した。

今夜、台所で宮家の男どもが連歌をした。明け方になって百韻終わったそうだった。

さて裏松義資中納言から、先日送った蜜柑の返事が届いた。とても丁寧なお返事で、うれしかった。

二十一日、晴。冷泉正永が帰っていった。

さて只今聞いたところによると、先日、常住院門跡が火事になったそうだった。その後、一条町も焼けたという。このところ、上京では相次いで火事になっている。

二十三日、晴。法安寺の風呂に入った。宮家の女性、田向芝殿やその夫である田向参議以下の者たちも連れて行った。沐浴し終わって、一献の酒宴があった。

日照りで光台寺の井戸も干上がる

最近の日照りで光台寺の井戸も干上がったそうだった。それで法安寺へ水をもらいに来たそうだった。寺家の煩いも大変だなと同情した。

五辻教仲が死ぬ

聞くとところによると、危篤であった五辻教仲が今日死去したそうだった。まだ四十歳にもならない。惜しいことだ。五辻の親である故真覚入道はずっと以前から宮家に仕えて功績があったので、特にかわいそうに思った。

足利義持、塔頭大通院の建立を急ぐよう指示する

二十四日、晴。夜に用健がいらっしやうした。慢首座も一緒だった。夜にやってくるとは変だと思っていたら、慢首座は鹿苑院の使者として大光明寺に来たのだそうだった。塔頭大通院を急ぎ建立するようにとの室町殿のご意向を受け、大光明寺長老へその旨を連絡しに来たという。長老は了承して、急いで造営を企画しますと返答したそうだった。この事を急いで告げ

るために、夜にもかかわらずやって来たという。とてもめでたいことで、喜ばしい。とりあえず一盃の酒を二人に勧めた。そしてすぐに出ていった。

二十五日、雪や霰などが降った。寒気が甚だしい。塔頭大通院建立の件について、大光明寺長老へ使者として田向参議を送った。建立にご同意頂いたと伺って、喜んでいる旨を伝えた。先方からはないがしろにせず、きちんと建立しますとの返事があった。

順番で薪を焼く会、いつものように妻の二条殿が当番として準備した。

扁額「宝珠庵」の揮毫

さて禅照庵が依頼してきた横額に庵号を書く件だが、このような大きな文字を書いたことがないので、いずれにせよ難儀な仕事である。しかし先方がなんとか書いてほしいを懇願していたので、何とか書いて送った。「宝珠庵」と書いた。並外れて下手な字である。字が下手だと批判されることはもつともなことである。とても差し障りがあることだ。

二十六日、晴。順番で薪を焼く会、蔭蔵主が当番としていささか準備を整えてくれた。とても賑やかな会になった。

浄金剛院光明庵が焼ける

ところで只今聞いたところによると、昨日の午前十一時、椎野の浄金剛院にある光明庵が焼けたそうである。とても驚いた。この九月に修繕したばかりである。いくほども経たないで焼失するとは、不思議なことだ。すぐに行光を使者として現地へ派遣した。

【頭書】後に聞いたところ、もしかしたら放火ではないかということだった。白昼のことなので、特に変な話である。

二十九日、晴。蔭蔵主がいらっしゃった。今年になって初めてのお目見えである。疎遠の至りで、残念なことだ。

順番で薪を焼く会、いつものように当番の東御方が準備してくれた。

三十日、晴。西大路隆富が来た。これは毎月恒例の連歌会を、当番として準備するためである。一献の酒宴を特別に整えてくれた。神妙なことだ。参加者はいつもの通りである。午後九時に百韻を詠み終わった。

十二月一日、晴。「良い兆しがあり、すべての事に満足している。とても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

西大路隆富が一献の酒宴の後、帰っていった。用健がいらっしゃって、一献の酒宴を用意してくれた。思いがけないことで、すぐに酒を味わった。

夜に十種香をする

夜に十種香をした。蔭蔵主が勝った。一勝負だけ楽しんだ（※）。

※「一勝負だけ楽しんだ」…原文は「一勝、賞翫なり」とある。

和漢連句

二日、晴。和漢連句を懐紙一折り分、行った。私・蔭蔵主・重有・長資ら朝臣が参加した。人数が足りないので、ただ一折り分しただけだった。

常光国師の墨跡

さて、常光国師の墨跡四幅を蔭蔵主に預けた。これは、国師が父・大通院に書いてくださったものである。とても大事に保存していたが、お預かりしたいと頻りに御所望になるので、とりあえず預けることにした。「しばらくしたら、お返しします」と蔭蔵主は言っていた。椎野寺主が来た。

田向長資三歳男児の魚味祝い

今夜、長資朝臣三歳の息子の魚味のお祝いをするという。深夜になって、田向参議・長資朝臣・小児らが宮家へ来た。お酒一献を少々持参してきた。特に祝いとして御扇を与えた。

地震と客星

三日、晴。明け方に地震があった。この前は客星（※）が出現した。何か異変が起こるのだろうか。そのため朝廷では、来たる十三日からご祈祷

をするという。導師は妙法院宮堯仁親王。灯りをもつ殿上人の当番もお決めたそう。長資朝臣や隆富も当番に入れられたという。

さて私の息子の御魚味祝いが今月に予定されているので、陰陽師の賀茂在方朝臣に日時を占わせた。来た二十日と二十七日が吉日だと返事があった。まだお祝いの用意はできていないが、とりあえず日時を尋ねてみたのである。

※客星（きやくせい）：突如現れては、やがて消える星のこと。激変星や新星、超新星ではないかと解釈されている。

四日、晴。大光明寺の風呂に入った。椎野寺主・蔭蔵主以下を連れて行った。

夜に酒を飲んだ。先日の十種香で、蔭蔵主が一勝したので、そのお祝いとして宮家の皆が酒宴を用意したのである。そのついでに和漢連句もした。

五日、晴。夜に和漢連句をした。先日の懐紙一折り分に継ぎ足して、今回で百韻を終えた。

綾小路信俊の謹慎が解ける

さて今日、上皇御所で音楽会があった。綾小路信俊前参議も音楽会に参加した。去年の春から上皇様の覚えがうるわしくなく、自宅に謹慎していた。しかし、今回お許しが出て、音楽会に参加したそう。うれしいことだと連絡があった。

六日、晴。祐譽僧都が来た。以前から若狭国松永荘にいたが、最近、京都へ戻ってきたそう。一献の酒を少し持参してきた。しばらくして出ていった。

いつものように田向参議が順番で薪を焼く会を準備した。

和漢連句

七日、晴。椎野寺主が順番で薪を焼く会を準備して下さった。そのついでに和漢連句をした。参加者は私・椎野・用健・蔭蔵主・田向参議・重有朝臣・長資朝臣・寿蔵主・具侍者らである。午後十一時に百韻を詠み終

わった。

ところで後に聞いたところによると、前管領の一族である畠山満理修理大夫の屋敷が全焼したそう。その屋敷から出火したそう。昼に起こったことだという。

一色義貫が侍所頭人を辞任したそう。その後任として京極高数が任命されたという。

貞成、法安寺でお百度を踏む

八日、晴。法安寺へ参詣した。私自ら、お百度を廻った。小さなき物が治り、病氣平癒の立願が果たされたためである。

その後、寺僧の部屋で酒を飲んだ。田向参議・重有・長資朝臣・慶寿丸も一緒に飲んだ。

十日、晴。蔭蔵主がお寺へお帰りになった。

十三日、晴。朝廷でご祈祷が始まったそう。長資朝臣が灯火を持つために出仕した。

今出川家から鞆鼓・撥箱・雑筆一卷・伊呂波畳字十帖が送られる

さて今出川家からいろいろな品物を取り寄せた。鞆鼓は今出川家が大切に保管してきた楽器である。これを宮家で預かっておくことにした。もし今出川家を相続する者が出てくれば返すと約束した。

蒔絵でばちが二つ入っている撥箱は故今出川公行前左大臣の形見として差し上げますと、左大臣の未亡人である陽明禅尼が言ってきた。

故三条公忠内大臣の筆跡などを収めた雑筆一卷や伊呂波畳字（※）十帖なども献上してきた。これもすべて陽明禅尼の取り計らいである。神妙なことだ。これらを一目みて、今更ながら悲しみがこみあげ、ひたすら涙を流し続けた。

※畳字（じょうじ）：畳字は古辞書で意味分類した部門の一つで、漢字熟語をあげる。色葉字類抄などにみられる。

十四日、晴。長資朝臣が戻ってきた。ご祈祷は厳かな儀式だったそう。

灯火を持つ殿上人は八人。法会は薬師法であった。清涼殿で行われたという。

順番で薪を焼く会は私が当番である。いつものように一献の酒宴をした。これで薪を焼く会の当番は一巡して終わった。

貞成、薬食いと初めて山犬を食べる

ところで、小さなでき物を完治させるのは難しいので、薬食いとして山犬を食べた。山犬を食べたのは、初めてである。不浄な物を食べるのは嫌だったが、良薬だというのでしかたなく食べた。

安楽光院長老が来た。不浄な山犬を食べて取り乱しているの、対面しなかった。

十五日、晴。綾小路信俊前参議が来た。毎月恒例の連歌会の当番幹事として準備をするために来たのである。神妙なことだ。参加者は椎野以下、冷泉正永や生島明盛らも参加した。毎月の当番が一巡して最終回となった。めでたいことである。

夜にまた台所で、宮家の男どもが連歌会を行った。徹夜で連歌を詠んだそうだ。

さて御香宮神主となっている三木善理の息子が今夜、成人式を行うという。長資朝臣に烏帽子を被せる役をしてもらいたいと願い出てきたそうだ。田向家でそのお祝いの儀式をするという。私が名前を付けてやった。それで宮家御所へも一献の酒が献上されてきた。三木家としては特別に思うところがあるのだろうか。三木家としては宮家に降参したということなのだろうか。

聞くところによると今日、上皇御所お庭の池に水を入れたそうだ。これで御庭の整備はほぼ完成ということだろう。

足利義持、賀茂川河原の田楽を見物する

また賀茂川の河原で寄付を募るための田楽が行われたという。このところ、このような田楽の興行が度々行われているそうだ。今日の田楽で

は室町殿が御棧敷にお入りになって見物された。この御棧敷は畠山満家左衛門督が準備したという。十二月に田楽が上演されるのは珍しいことだそうだ。

琵琶法師の城宇座頭

十六日、晴。琵琶法師の座頭が来た。寿蔵主が招き入れたのである。この琵琶法師は、大光明寺長老が鼻負にしている座頭だという。城公検校の弟子である。名前は城宇というそうだ。若い座頭だ。芸の力はある者だという。

平家物語を二、三句語らせた。綾小路前参議・田向参議以下、聴衆は大勢だった。平家語りを聞きながらの一献の酒宴を、宮家の男どもが用意してくれた。城宇に扇と檀紙十帖を与えた。

十七日、晴。椎野が寺へ帰った。夜に音楽会をした。採桑老・蘇合三帖・蘇合三帖急・万秋楽破・白柱・輪台・青海波・千秋楽と朗詠二首。綾小路前参議と長資朝臣と一緒に演奏した。

十八日、晴。大光明寺へ行った。宮家の女性たちも一緒に行った。明後日の二十日は父の御命日である。しかし、それを繰り上げて今日、焼香しに行ったのである。二十日には別件の用事があつて差し支えがあるからだ。それに歳末のお礼も兼ねて、早くお参りしたのである。

綾小路信俊前参議が急ぎ帰っていった。来たる二十一日の内侍所御神楽に参加するよう、幹事の葉室宗豊朝臣が奉じた命令書が届いたからだ。それで急いで帰ったわけである。

二十日に予定している私の次男の御魚味祝いに参列する予定であったが、綾小路は帰ることになってしまった。残念だ。しかし、二十一日当日には必ず参列しますと堅く言っていた。

長資朝臣が京へ出かけた。明日の朝廷ご祈祷の最終日でも灯火を持つためである。

十九日、晴。次男の御魚味の儀式を明日行うことが確定した。幹事は長資

朝臣、お給仕の役は田向参議、お膳を運ぶ役は重有朝臣・長資朝臣・隆富らである。綾小路前参議も参列しますと言っている。古い例とは異なり、儀式の詳細は省略して行うことにした。しかし大事なことは(※)しっかりと取り計らうつもりである。

廊御方が内々の事は万事取り計らってくれる。一献の酒宴は広時が準備している。御所でのことを私はほとんど取り計らっていないが、部屋の整備だけはしっかり行うつもりである。

世尊寺行豊朝臣が来た。明日の儀式ではお手伝いしますと言っておきながら、急用ができましたのと言って帰ってしまいました。

ところで今出川家御所の侍である入道がやって来た。私の面前に呼んで、いろいろと話をした。

今出川家代々秘蔵の小琵琶

小さな琵琶一面を故今出川公行前左大臣の未亡人である陽明禅尼が進上してきた。今出川家に代々伝えられた楽器である。この楽器を使う必要があったので、頼んで進上してもらった。私が幼い頃弾いていた琵琶である。今となつては今出川家に無用なものであるから、宮家に留め置くつもりだ。

陰陽師の賀茂在守が新曆などを献上する

陰陽師の賀茂在守が来年の曆や占いの本などを献上してきた。

※「大事なことは」：原文では「寄り来る事は」とある。

貞成次男の魚味の儀

二十日、晴。朝の間、雪が降ったが、夕食時には晴れた。朝早くそれぞれ麻の狩衣を着た綾小路前参議や西大路隆富らが来た。今日は次男の御魚味祝いの儀式である。御装束以下はすべて略式だ。古い先例には及ばない。

儀式の場の室礼

客殿・常の御所・庇の間などを隔てている障子を撤去して六ヶ間にし

た。その南面に緑色のすだれを懸け渡した。妻戸の間ならびに廂の間の御すだれを巻いて、お膳を運ぶ役の者が通る道とした。母屋の奥の西北に屏風を立て廻した。大文の畳二帖を南北方向に敷き、私の座席とした。その東側奥の方にも大文の畳二帖を東西方向に敷き、次男の座席とした。その畳の上に毛織物一枚を敷いた。本来であれば、東京錦(※)の縁をつけた方形の敷物のだが、入手しなかったので毛織物を敷いた。その東側に小文の畳を東西に敷いた。また端の方にも同じ数の小文の畳を東西に敷いた。妻戸の間一間には畳を敷かなかった。お膳を運ぶ役の者が通る道なので、幅の狭いムシロを敷いた。庇の間二間には紫縁の畳を敷いて、殿上人の座席とした。

朝早く御香宮・権現・山田宮の三社でお経を読ませた。日時のこと兼ねてから陰陽師の賀茂在方朝臣に占わせてある。本来ならば当日来た陰陽師に日時を問うものである。しかしそれは省略した。陰陽師によると、今月二十日、時は午前十一時、東南の方角をお向き下さいとのことであった。

西大路隆富が二時間遅参する

開始時刻となつて、人々は集まってきた。綾小路信俊前参議は麻の狩衣、田向経良参議は衣冠、庭田重有朝臣は薄青の狩衣、田向長資朝臣は幹事役で麻の狩衣、西大路隆富も麻の狩衣で、他にもそれぞれ参列してきた。開始時刻は午前十一時だが、隆富はまだやってこない。彼はお膳を運ぶ役なので、来るのを待った。午後一時にやってきた。

魚味の儀が始まる

隆富が到着するとすぐに私は狩衣と大口袴を着て座席についた。次に幹事役の長資朝臣が関係者を呼び出した。綾小路と田向二人の参議が着席した。次に次男が席についた。次男は、薄淡色の練貫で織った御柏かしらの上に、同じく紅梅色の練貫で織られた御服を着ていた。次男は重有朝臣に抱きかかえられて着席した。そして母の二条殿が脇に控えていた。

次にお膳を運ぶ役の重有朝臣・隆富・慶寿丸が御前の物を女官に渡した。御前の物は御厨子所の小預が調製して進上してきたものである。次に御盤を運んだ。饗膳が二台、脇御膳が二台、菓子が一台中である。

天児に御飯を供える

次にお給仕役の経良卿が御前に進んで、御膳の順番に次男に食べさせた。その時、次男を東南の方角に向かせて、食べさせた。

まず少量の御飯を天児（※）の前の土器に盛った。次に三箸分のご飯を次男に食べさせた。次に鯛と刺身（※）を食べさせた。次にご飯を浸した御汁物を飲ませた。

次にお膳を運ぶ役の長資朝臣と隆富が御盃と片口の銚子を持参した。これでお給仕役が次男に御酒を飲ませた。食事が終わって、お給仕役の経良は元の座席に戻った。

髪置き儀

次に次男の伸びた髪を先を肩の辺でそろえて切る儀式があった。この儀式は重有朝臣が手伝って、長資朝臣が務めた。この儀式が終わって、次男は奥へ退出した。

次にお膳を運ぶ役の者が進み出て、御前の物を撤収した。

八献の祝宴

次に一献の酒宴が用意された。宮家の女性たち、東御方・廊御方・上臈・二条殿・芝殿も酒宴に参加した。三献目の時、御膳が出された。五献目の時、朗詠が歌われた。令月（※）と徳是（※）を綾小路前参議・田向参議・長資朝臣が歌った。

六献目の時、雅楽が演奏された。曲は万歳楽・三台急・太平楽急であった。笛は綾小路前参議、笙は長資朝臣と豊原郷秋、琵琶は私、太鼓は田向参議が演奏した。先例では魚味の儀式に舞楽の演奏はない。しかし当座に酒宴の途中で豊原郷秋が来たので演奏することにしたのである。その後、八献が終わり、人々が座を起って、儀式はお開きとなった。

今日の儀式は型通りに厳めしく行われた。一つとして手違いはなく、無事に終了した。特に次男の御振る舞いは素晴らしかったので、すべてに喜ばしい兆しが満ちあふれ、とてもうれしかった。人々も賛美していたので、めでたいことである。

台所では村人たちが終夜、酒盛りをする

台所をいろいろな雑用をこなす場所にしており、小川禅啓以下主な村人たちが全員詰めていた。儀式が終わってから台所では一晩中酒盛りや乱舞で盛り上がっていた。万歳楽の今様を歌っていた。

さて一献の祝い酒を進上してくれた人々は、以下の通りである。

廊御方・藤原能子典侍殿・綾小路信俊前参議・田向経良参議・庭田重有朝臣・西大路隆富・祐誉僧都。地下の役人、豊原郷秋。伏見荘の村人たち、小川禅啓・三木善理・御所侍の石立ら・宝泉・等持。

酒海という大きな酒甕、あるいは一献代の銭などとして、皆が献上してくれた。

一献を用意してくれた広時には、無事幹事を務めてくれたので、特別に太刀を与えた。御乳母人の賀々には御前の物などを褒美として与えた。隆富は三献が終わると早退した。

ところで一献の酒宴の時、私のお膳を運ぶ役を四位・五位の者が務めた。公卿である綾小路前参議や田向参議の前にはお膳を運ぶ者がいなかった。六位の者がいなかったため、その役を務めるべき者がいない。それで、隆富がその役をしてくれた。長資や重有ら殿上人の前にはお膳を運ぶ者がいなかったため、雑用を務める法師である生島明盛が務めてくれた。内々の事だといっても、しっかりとした給仕の体制がとれなかったのは、よろしくないことであった。

※東京錦（とうぎょうき）：トンキンから渡来した錦。

※天児（あまがつ）：原文では「阿末加津」とある。幼児の傍らに置き、形代（かたしろ）として凶事を移し負わせた人形のこと。なお、原文に

「三把」（さば）とあるのはお供え用のご飯のこと。

※「刺身」：原文には「鮮味」とある。

※令月：『和漢朗詠集』祝七七四「嘉辰令月」。

※徳是：『新撰朗詠集』帝王六一五「徳是北辰」。

二十一日、晴。昨日の魚味の儀式が無事終わっておめでとうございますと面々からお祝いされた。綾小路信俊前参議が帰っていった。今夜は朝廷で内侍所御神楽なのである。豊原郷秋も帰っていった。

上皇様へ年末のお礼として私の手紙を差し上げた。そのついでに、上皇御所にある「巖」という琵琶を私にお預け下さいませんかと書き足しておいた。ただ上皇様はきつとお許しにはならないだろう。しかし、まずは申し上げて様子を見ることにした。

陰陽師の賀茂在方朝臣が来年の暦を献上してきた。

【頭書】今夜、朝廷で官職の任命式があったそうだ。久我清通と徳大寺実盛が大納言に任命されたという。

二十三日、晴。陰陽師の安倍有清朝臣が来年の暦と八卦占いの本などを献上してきた。

二十四日、晴。室町殿への年末のお礼を取り次ぎ役の裏松義資中納言から申し入れるよう、田向経良に命じた。それで田向参議は京都へ出ていった。室町殿はこのところ石清水八幡宮へお籠もりしている最中だ。

天下が一変するという神託

その石清水八幡宮で神様の託宣があったという噂がある。国の治めがなっていないので、日本国が一変するというような、種々の託宣が出たという噂もある。

芳徳庵に盗人が入る

二十五日、晴。今日の明け方、芳徳庵に盗人が入って、尼たちの衣装や所有している品々などを盗んでいったそうだ。もしかしたら庵の内部事情を知っている者の仕業かもしれない。不審なことである。

惣得庵の新庵主である理勝と明元が来た。亡くなった庵主の遺品である沈金の香箱一つと香台を進上してきた。故庵主の形見としてご覧下さいと話していた。故庵主の四十九日法要も無事終えましたとの報告もあった。宮家は不如意で、いまだなんの助成金も惣得庵に出していないことが残念である。少し酒を勧めた。その後すぐに帰っていった。

田向参議が帰ってきて、世間話を話してくれた。先日官職任命式で洞院満季が近衛大将の兼任を希望した。ところが久我新大納言も同じく近衛大将の兼任を希望して、室町殿へ取り成しをお願いした。ところが後小松上皇様は、洞院が兼任する方が理に適していると度々仰った。一方、室町殿は久我が兼任することをなおも主張し続けた。それで結局、両者ともに近衛大将の兼任が認められなかったそうだ。

一条兼良内大臣兼左近衛大将は、朝廷・將軍家いずれからも覚えがよろしくない。それで、左近衛大将の兼任を解除しようということになっていたようだ。ところが洞院と久我の争いがあり両方とも兼任を認められなかったため、一条の兼任解除は見送られたそうだ。一条にとっては幸運なことであつたらう。

早天の慈雨

二十六日、一日中、激しい雨が降り続いた。秋の終わりから早魃だったので、井戸の水さえ枯れ果てていた。そうしたところに、この大雨は恵みの雨であり、めでたいことである。

慶寿丸が琵琶を習い始める

二十七日、晴。今日は吉日なので、いつものように煤払いをした。

ところで慶寿丸が琵琶を習い始めることになった。庭田家では琵琶を弾く先例があるので、慶寿丸に弾かせることにしたそうだ。そこで特別に万歳楽三手（※）を慶寿丸に教えた。簡単なお祝いの儀式をしてあげた。ただ今後、琵琶の才能があるようなら、ずっと教えてあげたいものである。

※「万歳楽三手」：原文では万歳楽に「三手」の割注があるが、三手の意味は不詳。

二十八日、朝から雨が降っていたが、夕方には晴れた。町経時朝臣が来たので、対面した。そしてすぐに出ていった。

風呂に入った。十二月、いつものように身を浄めたのである。

二十九日、晴。今日で暦も巻き尽くした。大光明寺長老以下の僧たちが年末のお礼に来たので、対面した。晦日は慌ただしいので、今日挨拶に来るのは配慮が足りないと思う。しかし近年はこれが佳い先例となっているので、しかたがないことだ。

除夜の鐘がなり、いつものように年越しのお祝いをした。今年も慌ただしく、いろいろなことがあった。明春もよいことがあるよう、念願するのみである。

後で聞いたことだが、今夜、景愛寺住職のお部屋が火事になったそうだ。仏殿は無事だったという。

宮家の細々としたこと、世間のうわさ話などを詳しく記録した。もつとも後進の者たちがこれを見ることは、少なからず差し障りがある。努々他家の者には見せてはいけない。

（続）

